

「牛丸冬画集」に見る日清戦争

－鷗外が見聞した戦地の風景－

曾根原 理

1. 牛丸冬と牛丸文書

本稿は、明治期に早世した軍医（牛丸 冬）が、戦地で描いたスケッチ「牛丸冬画集」（牛丸文書 I -1-1、以後「画集」と略記）の紹介と、若干の周辺情報の提供を目的とする。

牛丸冬（うしまる ふゆ、1871-95）は、秋田県士族の出身で、第二高等中学校の医学部を明治24年（1891）に卒業している¹⁾。明治20年（1887）4月に設置された第二高等中学校（7年後に「第二高等学校」と改称）では、同年8月に帝国大学進学者を養成する「本部」とは別に、医師養成にあたる「医学部」が設立された（4年制）。それに伴い廃止された宮城・秋田・山形の各医学校の学生が、翌21年（1888）、一年ずつ学年を下げて受け入れられた。同22年（1889）4月から授業を開始、7月からは片平地区の校舎に移っている。最初の学生募集による新入生は、同年9月入学に始まる²⁾。したがって同24年（1891）11月卒業の牛丸は、医学校から受け入れられた、ごく初期の卒業生と考えられる。

卒業直後の消息は不明だが、明治25年（1892）に軍医となり、同27年（1894）に始まる日清戦争（中国では「甲午戦争」）に従軍している。翌年4月17日に下関で講和条約が結ばれた後は、日本領となった台湾の平定戦に転じ、この年11月6日に台湾で戦病死している³⁾。

東北大学史料館が所蔵する「牛丸冬文書」全207点は、平成28年（2016）に御子孫の牛丸和人氏⁴⁾から寄贈された史料群である。内訳は、①文書99点、旧蔵品4点、②写真104点から成る。中でも、日清戦争に従軍する中で作成／使用された諸史料は、戦地での様子を知る事の出来る貴重なものと思われる。戦後70年を過ぎ、戦争体験者も数少なくなった現在、こうした時代が日本にもあったことの記録として整理・公開し、永く伝えていくべきであろう。すでに目録を史料館のホームページ上で公開し、2018年6-9月の「新公開資料速報展」で一部の展示を行った⁵⁾。本稿も、それに列なる作業の一環である。

2. 牛丸と日清戦争

日清戦争の公的記録の一つである『明治二十七八年役陣中日記』⁶⁾では、牛丸は明治27年（1894）8月の記事に、第5師団（広島）の軍医として初めて登場する（以下の引用文では、改行は／、割注は〈 〉で表示、丸括弧内は筆者注）。同師団は7月30日に本隊、8月2日の宣戦布告に続いて残りの部隊も朝鮮半島に渡った（「中路兵站」として釜山からソウル付近を担当するようになる）。牛丸が乗船していた熊本丸（後掲「画集」第11図）は、8月10日に「第五師団ノ兵站軍医部」を乗せ宇品を出港し、同12日に釜山に着いている。

8月17日の記事によると、朝鮮半島から大陸に渡った日本軍は、ほぼ初めての対外戦争のためか「途上病者続々発生」という状況だったため、各地に軍医を配属した。その中に「聞慶兵站司令部ニ／三等軍医牛丸冬／看護手三名」とある。赴任した聞慶（現在の慶尚北道聞慶市）は、釜山とソウルを結ぶ街道上にあった。しかし体調を崩し（後述）、同30日の記事には「在釜山中路兵站軍医部」からの報告として「釜山兵站司令部附ヲ命ス 同（三等軍医）牛丸冬」とあり、

9月24日の記事には「牛丸三等軍医冬ヲ内地へ帰ヘス」、同27日記事にも「牛丸三等軍医冬ハ広島へ帰ヘス見込ナリ」とある。10月1日の記事には、広島の本営から軍医部長（森）に釜山に残すべき者が指示されているが、牛丸ほか数名はそこから漏れている。

その後、牛丸に関する記事は見えなくなる。後述のように旅順や台湾などで活動している筈だが、それについては諸記録に譲らざるを得ない。『明治二十七八年役陣中日記』で次に牛丸が登場するのは、翌年11月8日の逝去の記事となる。

台湾総督府軍医部長〈石阪〉ヨリ左電到着／二等軍医牛丸冬、昨日〈六日〉午後病死ス。
同人ハ昨年来功勞少カラス。進位ヲ上申セリ。

ところで、文豪として知られる鷗外（森林太郎、1862-1922）も、日清戦争において、軍医（中路兵站軍医部長、一等軍医正⁷⁾）として従軍を命ぜられた。彼は明治27年（1894）9月2日に広島県宇品港を発ち、同4日に釜山着。以後10月3日まで釜山に滞在していた。そうであれば、「画集」のうち少なくとも第1～8、10、14-15図は、描かれた時期から考えるなら、鷗外も見た釜山の光景であったと考えられる。

鷗外の著作（A「徂征日記」、B「日清役自紀」、C「台湾総督府医報」）に牛丸が登場する箇所は、釜山滞在中では次のとおりである（カタカナを平仮名に替え、私に句読点を補う）。

- ・三等軍医 牛丸冬／右聞慶に在りて肺炎に罹る。(B 明治27年9月20日)⁸⁾
- ・三等軍医 牛丸冬／肺炎の回復期に居る。担当する所なし。(B 同年9月21日)⁹⁾
- ・明治27年9月20日兵站総監の命令到る。徑に中路兵站の衛生兵を分ちて、残留・前進の二班となして以て待つ。(中略)乙、前進班／…三等軍医 牛丸冬…。(B 同上)¹⁰⁾
- ・第五師団に転ずるもの／三等軍医 牛丸冬。(B 同年10月1日)¹¹⁾
- ・三等軍医牛丸冬、報じて曰く、洛東江の水は中等の白濁あり、微赤色を帯ぶ、臭なし、土味あり、と。(B 同上)¹²⁾
- ・味爽、牛丸冬の仁川に之くを送る。(A 同年10月2日)¹³⁾

その後戦争遂行のため、従前の第一軍（第五師団など含む、軍司令官は陸軍大将の山縣有朋）に加え、第二軍（軍司令官は陸軍大将の大山巖）が編成されることになり、第二軍の軍医部長を命ぜられた鷗外はいったん帰国し、10月6日に本営（明治27年9月～同28年4月は広島城内）で辞令を受け、同16日に宇品港発、同20日に大同江口漁隱洞着、以後翌年5月まで中国大陸の旅順周辺で軍医としての任務に就く。牛丸がこの時期に鷗外の記録に登場するのは、12月18日に旅順口で「牛丸冬を訪ひて俱に午餐す」(A)¹⁴⁾という記事のみである。しかし、「画集」第21、25図など、旅順で描かれた絵は、鷗外も見た可能性が高い光景が含まれるだろう¹⁵⁾。

牛丸と同様、鷗外も台湾平定戦に赴くことになり、明治28年5月22日に一時帰国（宇品着）の後、同24日に台湾に向けて宇品港を出発した。鷗外は9月22日に帰国の途につくまで、台湾でも主に北部（台北など）に滞在していたため、中・南部の戦闘¹⁶⁾に加わった牛丸に関する記事は、同年7月26日の一件に限られる。

- ・二等軍医牛丸冬、看病人二人を率ゐて至る。之を近衛師団司令部に派遣す。(C) ¹⁷⁾
- ・牛丸冬至る。(A) ¹⁸⁾

ただし鷗外は、台北滞在中も軍事関係の情報を知り得る立場にあり、さらに明治38年（1905）に『能久親王事績』を著すにあたり、台湾中・南部の戦争の状況を十分調査したと考えられることから¹⁹⁾、「画集」に描かれた場面そのものは見ていないとしても、現地の情報を見聞していた可能性は高いと思われる。

以上のように日記等の記述から、鷗外と牛丸の関係を垣間見ることが出来る。鷗外は単に牛丸の上司であった期間が存在しただけでなく、個人的な面識もあり、牛丸が描いた場面もあるいは実見し（釜山や旅順）、あるいは様子を伝え聞いていた（台湾）。その意味では「牛丸画集」の絵は、鷗外も見聞きした風景といっても過言ではないだろう。

3. 牛丸と石黒忠憲

牛丸と最も深く関係した陸軍関係者として、石黒忠憲（いしぐろ ただのり、1845-1941）が挙げられる。彼は、日本陸軍草創期の軍医制度を確立し、明治23年（1890）に第5代の陸軍軍医総監となった有力者で、日清戦争の際は医務局長として大本営で野戦衛生長官をつとめ²⁰⁾、鷗外や牛丸の上司であった。後に貴族院勅選議員、日本赤十字社の第4代社長などを歴任し、明治28年（1895）に男爵、大正9年（1920）に子爵となっている²¹⁾。

牛丸と石黒の関係を良く示すのが、千秋公園²²⁾に建てられた、高さ約2.5mの「陸軍軍医牛丸君碑」²³⁾で（右写真、2018年10月7日撮影）、以下のような碑文が記されている（改行と句読点は私に付し、字体は新字体、風化等で破損した箇所は空郭□で表示した）。



陸軍軍医贈従五位牛丸君碑

元帥陸軍大将正二位勲一等功二級侯爵大山巖篆額

陸軍軍医総監正四位勲二等功三級男爵石黒忠憲撰文

君諱冬、牛丸氏。秋田県士族。父通称平八、諱重熙。母福原氏。君資性明敏、篤学純孝、専修医学。明治廿五年十二月、任陸軍三等軍医、時年二十二。明年二月、叙正八位。廿七年、清・韓之役起也、君属第五師団兵站司令部。八月、抵朝鮮更属聞慶兵站司令部、不幸羅赤痢。十月、帰朝入広島陸軍病院。既病癒、請再就外役。十一月、属某聯隊赴遼東、服旅順及威海衛之役。廿八年三月、晋二等軍医。六月、本隊凱旋時、台湾未平、我軍触瘴毒、獲病者頗多、更要軍医。余因以君擬其任、君欣然曰、願得一見老母而發、帰省三日而還。余以為、君帰朝未一句、又遣之、实情之所不忍。因奏請於大本営、特拜（四字闕字）天顔。君臨別感激曰、未有寸功、辱此（闕字）恩榮、此行萬死靡悔。老母聞之、亦必喜之矣。其到任也、鞠躬鞅掌、夙夜不懈。君素好絵事、臨發猶携顔料、人皆

怪焉。而在兵馬倥傯間、公文中往々挿図画、以申□事状。又描所過之山水風俗、以遠寄老母、而慰藉之。於是人始服其篤志□。十一月、病復発。特陞叙従七位。十一日、遂歿台南、享年二十五。荼毘其遺骸、以送郷里、葬諸羽州秋田城下先塋之側。先是官將表君功、而中道遽歿。於是三十年十一月、以（闕字）特旨賜金若干於遺族。明年十月、又以（闕字）特旨贈従五位。夫我衛生部將校、従軍病歿者二十三人、而浴贈位恩典者僅三人、君其一也。可謂死有余榮矣。頃郷党相謀、將立碑紀其功。福原氏具状、請銘於余。余素不文、然君平生以余為知己義、不得辭銘曰、

維山維水 万里馳驅 敵地形勢 報以画図 曾供天覽 不亦榮乎 忠孝無欠 臣子規模
 明治三十二年己亥二月 東京 □□□書

以下、大意を示す。

牛丸君の名前は冬といい、秋田県士族である。父親は通称が平八、本名は重熙という。母は福原氏の出身。彼は明るく利発で、親孝行で、学問に通じ医学を修めた。明治25年12月、22歳の時に三等軍医²⁴⁾に任ぜられた。翌年2月には正八位に叙せられている。明治27年に日清戦争が起きると、彼は第五師団に所属し出征した。同年8月には朝鮮の聞慶司令部に赴任したが、不幸にも赤痢にかかり、10月に帰朝して広島陸軍病院に入院した。快癒した後、11月には遼東半島に派遣され、旅順や威海衛の戦場に勤務した。明治28年3月に二等軍医に昇進した。

講和条約が結ばれ6月には凱旋することになったが、新たに日本領となった台湾で抵抗運動があり、平定戦が行われた。亜熱帯の風土病などに苦しむ兵士が続発し、軍医が足りなくなったため、私（石黒）は牛丸君に打診した。彼は、老いた母に一目会って、三日ほどで戻りますと言った。私は、ようやく帰国して10日も経たず戦地に向かわせるのは忍びない気がした。そこで大本営に申し出て、特に天皇陛下に拝謁する機会を設けた。彼は大変感激し、戦地に赴き、日夜怠ることなく働いた。彼は平生から絵を描くのに長けていて、出征に臨んで顔料を携帯した。戦場で報告書などを作成する際に、挿絵を描いて状況を説明した。また老いた母に、通り過ぎた町や山河の様子を描いて送り慰めたので、最初は不思議に思っていた人々も、彼の技量や優しさを知り心服した。しかし戦地の無理がたたなり、11月に発病し、ついに台南で逝去した。25歳だった。

遺骸は荼毘に付された後、郷里の秋田に送られ、先祖の墓の横に眠っている。彼の顕著な働きや、若くして亡くなったことを悼み、明治30年から翌年にかけて遺族に金一封、本人には従五位が贈られた。医療関係者が所属する衛生部には、日清戦争で病没した将校が23名いるが、死後の贈位をうけたのは3名だけで、牛丸君はその1人である。さらに地元の人々が記念碑の建立を企て、母親から私に碑文を請う手紙が来た。私は文章に長けているわけではないが、彼と深く関わった者として、彼の勲功を詩文に表す。(大意ここまで)

石黒は「牛丸冬画集」に収められた明治28年11月10日書簡（書簡3）で、牛丸を実子のように思っていたと述べている。また、同年12月4日書簡（書簡2）でも、彼の才能や性格を高く評価し、実際に明治天皇や皇太子（後の大正天皇）への拝謁を実現させたという。そうした関係が、この記念碑の文章にも表れていると言える。

4. 「牛丸冬画集」史料紹介

【書誌等】

卷子1軸。明治28年（1895）成立。表紙原装、見返し無。外題／巻頭書名／尾題すべて無。法量は縦30.9×全長1,196.6cm。

【翻刻】

（凡例）

- ・序文と書簡は翻刻のみ、各図は画像を掲載する。各図は配列に従い番号を付し（一部を除き私案）、私に標題を付し囲みで表示する。各図の中にある文字情報等は、挿絵中の文字を除き、全て翻刻して掲載する。
- ・漢字は原則として新字体とする。改行は必ずしも原史料とは一致しない。

（序文）

軍医牛丸冬君ノ戦地ニ在ルヤ、少閑アレバ見ル所ヲ画テ以テ在郷ノ母堂ニ寄セ、書意ノ尽サル所ヲ補フ。母堂集テ、送候一卷ニナスモノ、即此也。曩日凱旋、未タ十数日ナラズシテ、復タ台湾出征ヲ命セラル。其発スルニ臨ミテ、彩料ヲ行李ニ収メテ曰、亦時々絵テ母堂ニ寄ント。余、其志ノ労キヲ感シ、請テ其由ヲ書ス。嗚呼、君性嚴而篤、其性移シテ以テ我在遠ノ病兵ニ及フ可キ也。

明治二十八年七月七日

石黒 忠恵識（朱角印2）

第1図 朝鮮の衣服

「17/ IX」 「第一」ⁱ



第2図 荷物を負う朝鮮の民

「18/ IX」 「第二」



i 「9月17日完成」 「第1図」の意味か。以下同じ。

第3図 荷物を負う朝鮮の民

「16/ IX」 「第三」

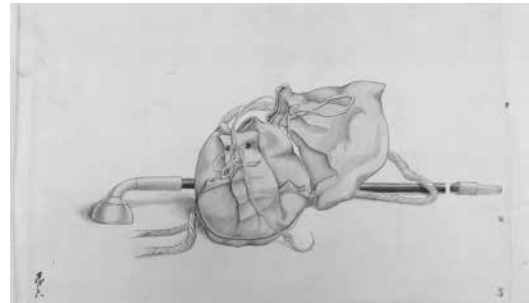


第5図 朝鮮の男女

「第五」 「21/ IX」 「19/ IX」ⁱ

第6図 キセルと袋

「第六」 「19/ IX」



第4図 朝鮮の帽子類

「19/ IX」 「第四」



第7図 川船 (上) / 洗濯女たち (下)

「第七」 「24/ IX」



i 右側の男の絵が19日、左側の女の絵が21日に完成か。

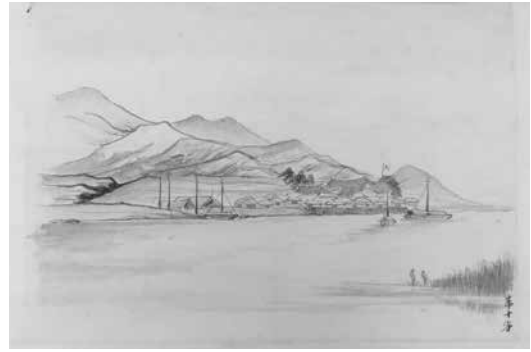
第8図 壁を背景に朝鮮の民

「第八」「二十七年九月廿七日」



第10図 岸辺の風景

「第十」「17/ IX」

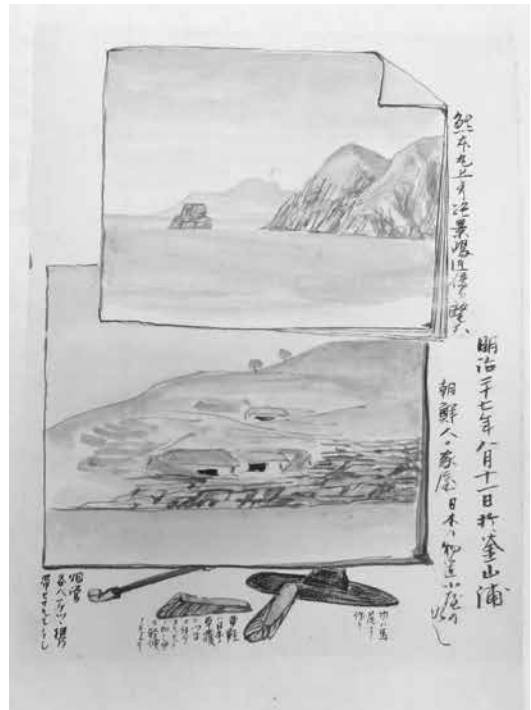


第11図 釜山浦の風景

「明治二十七年八月十一日於釜山浦」「熊本丸上より絶景嶋近傍に望む」「朝鮮人の家屋日本の物置小屋の如し」「巾ハ馬尾ニテ作り」「草鞋ハ日本の草履ニツマヲ付ケタルモノノ如シ中々軽便ノモノナリ」「煙管 各ハ一ケツ、携帯セサルモノナシ」

第9図 キセルを銜える女

「第九」



第12図 風景と人物像

「明治二十七年八月十一日於釜山浦画ク」
 「釜山浦日本居留地 人戸約九百四十 釜山浦ノ三分ノ二を占む 樹木の鬱蒼たるは対州公の推ゐる処朝鮮に森あるは此の処のことも」
 「韓銭」「朝鮮の貴族」



第13図 人々の風俗

「朝鮮人の風俗 右ハ稍や高尚ノモノ 中ハ下等の小兒 左ハ雇夫」
 「明治二十七年八月十二日 釜山浦に於て呆齋ⁱ戯にかく」



第14図 府使の服装

「朝鮮国府使之服装 府使ニハ種々階級アレトモ約言スレバ日本ノ郡長乃至ハ県知事位ノ位置ナリ 朝鮮官吏ノ高級者ハ多ク色服ヲ着ス」
 「明治二十七年九月十五日於釜山画 旭水漁夫」



第15図 平民の服装

「朝鮮国平民之服装 (正装) 明治二十七年九月十六日於釜山津 旭水漁夫」



i 以下「呆齋」あるいは「旭水漁夫」の号あり。いずれも牛丸冬か。

第16図 一時帰国時の風景①

「長州壇の浦の暮色」「明治二十七年十一月三日於赤間関」「豊前門司之砲台」



第18図 旅順の戦場

「明治二十七年十一月廿一日之払暁」「十二月二十一日鎮魂祭之日ⁱ於旅順口」



第19図 砲台と水雷營

「大連湾柳樹屯中砲台及水雷營之図 明治廿七年於十二月二日於旅順口」



第17図 一時帰国の風景②

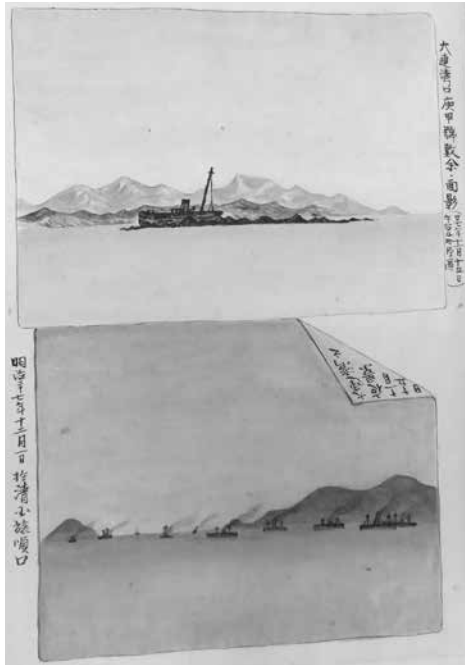
「芸州宮嶋」「明治二十七年十一月三日於馬関」



i 日清戦争において旅順要塞は1日の攻撃（11月21日）で陥落している。その翌月同日に鎮魂祭が開催されたということか。

第20図 大連湾の光景

「大連湾口庚申号敗余ノ面影（廿七年十一月十五日午後五時経過）」（上図）「大連湾之夜景 十一月十五日」「明治二十七年十二月一日於清国旅順口」（下図）



第22図 美人図

「支那之美人 旅順口分捕ノ写真ニ模ス 明治二十七年十二月五日於旅順口」



第23図 傾城図

「支那之傾城 明治二十七年十二月二十二日 於旅順口写」



第21図 旅順口の惨状

「旅順街之惨状（十一月二十二日） 明治二十七年十二月四日於旅順口」



第24図 水汲み

「明治二十八年一月十日於旅順口」



第26図 市場

「旅順口之市況 明治二十八年一月二十三日」



第25図 屍体を喰う犬

「旅順海岸之凄月」



第27図 雪中行軍

「明治二十八年二月一日之行軍 自山東省北虎口至同除家可」



第28図 海戦

「明治二十八年一月三十日午後四時鳳林集後方高地よりのぞむ」(上図)「明治二十八年二月八日之午前三時馬頭綏後營より海戦を見る」(下図)



第29図 阿片患者

「清国人民之怠状 阿片煙草ヲ喫スルノ図 明治二十八年三月中旬 旭水」



第30図 旅順口の遠景

「蛮子營砲台ヨリ黄金山砲台并ニ旅順口ヲ望ム 明治二十八年三月下旬 於旅順中新街舎營 (朱角印「呆齋」ⁱ)」



第31図 露営の夢

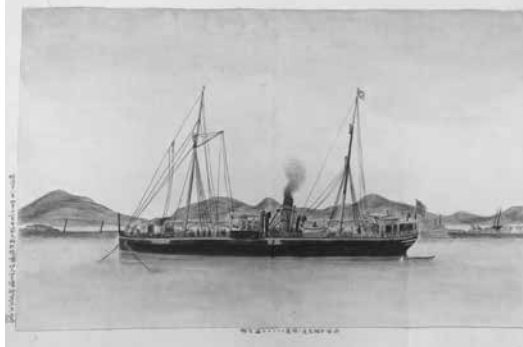
「明治二十八年四月上旬戯筆 (朱角印2「呆齋」ほか)」



i 以下の印記が、実際の印判なのか、捺印風に描いたものか、判別できず。

第32図 清国艦益生号

「帝国軍艦筑波ニ捕獲セラレタル益生号」²⁵⁾
「明治二十八年四月十一日午前九時於旅順口
人字壻砲台上写（朱角印「呆齋」）」



第33図 饅頭山砲台

「慶福營饅頭山砲台整暇（兵營）ヲ望ム〔威
遠砲台ノ后門ノ墻壁上ニ於テ〕」「明治二十八
年四月十五日」



第34図 親子の耕作

「旅順之新田」
「明治二十八年四月十六日清
国旅順ニ於テ（朱角印「呆齋」）」



第35図 魚雷室

「旅順口魚雷營内魚雷室」^{アンス}「杏子」
「明治二十八年四月二十五日」
「（朱角印「旭水」）」
「旅順口舎營に於て画かく」



第36図 入浴後の美人

「明治二十八年五月六日於旅順之舎營 浴
後之美人 旭水戯筆」



第37図 流血

「旅順之野花及一月三十日之百尺崖ⁱ⁾」「明治二十八年五月二十七日戯画」



第38図 近衛師団軍医部

「新竹舎營中之近衛師団軍医部（城外向宅五之家）」「欄外龍眼肉実及ヒそわ^(不明)」「明治廿八年九月十七日於彰化県写（朱角印「旭水」）」「(朱字) ②」



第39図 手術図

「明治廿八年八月十三日午后一時 後竜東南方高地ノ戦況 同日後竜ニ開キシ近衛衛生隊左半部（傷者ハ津野第二聯隊ⁱⁱ⁾旗手ナリ）」「明治廿八年九月十八日於彰化（朱書「旭水」）」「(朱字) ④」



i 百尺崖は、明治28年（1895）1月30日の日清戦争における激戦地。

ii 津野一輔（1874-1928、最終階級は陸軍中将）は、日清戦争時に近衛歩兵第二連隊付として出征し、明治28年8月に台湾で戦傷を受けている。

第40図 台湾婦人の風俗

「中歴附近ノ婦人」「台湾省後澗街婦人之風俗 明治廿八年八月十九日於後澗 冬画 (朱書「旭水」)」「(朱字) ①」



第41図 濁水溪

「明治二十八年十月六日之午前台湾濁水溪ⁱ 車絡口 (永靖街へ北斗間にあるもの)」「同年十月十六日於嘉義県 (朱書「旭水」)」「(朱字) ⑩」



第42図 北斗鎮南方の濁水溪

「明治二十八年十月七日之払暁 北斗ⁱⁱ 南方ノ河流」「同年同月於嘉義 (朱書「旭水」)」「(朱字) ⑪」



i 台湾で最も長い河川。中央山脈の佐久間鞍部に源を發し西に流れ、台湾海峡に注ぐ。
ii 現在の彰化市北斗。

(書簡1)²⁶⁾

(封書表書)

「仙台市立町三丁目百八番地 牛丸きく様 机下」

(封書裏書)

「東京市飯田町五丁目十四番地 山田定次郎」

拝啓 先般予報申上置候牛丸君御認之彩画、長官閣下より天覧、及ヒ東宮殿下之御覧ニ被
 供候、実ニ御名誉之御事ト奉存候、右相済、昨日相下リ候間郵送申上候、此分ハ分ケテ御
 保存、御大切ニ被遊候^(被カ)披仕度被存候、先ハ右用事ノミ、早々敬具、

十月廿四日

山田定次郎ⁱ

牛丸御老母様

机下

(書簡2)²⁷⁾

二日付之尊書唯今到来披見候、二等軍医牛丸冬葬儀之節者、貴地在勤之衛生部将校打寄加
 勢被致度候、同人葬式ニ祭文でも遣度候処、小官近日者日々夜半まで事を執り候繁務、特
 ニ祭文を起草候時間無之と、牛丸儀ニ付ては殊ニ哀悼深く一筆を執候に不甚と之のため、
 祭文等遣不申候、牛丸之霊も小官之此深情はよく知り居可申と存候、抑牛丸者、昨年
 出兵之最初より出征し、朝鮮ニて勤務中重病ニかゝり、癒て帰朝し、間もなく清国遼東へ
 出征し、遼東より帰りて僅に八日にて又々台湾^江出征を命せられ、此時には度々重ね一之
 出征故と小官より願立候、七月八日午後三時御会議席ニ於て特に拝謁被仰付²⁸⁾、拝謁済之
 上、小官は導き伴ふて御廊下ニ至り握手、別を告げたりしに、君恩之渥きを感じ、吾等眼
 に涙を浮かめ相別れ候こと、今旦に成ては永の別れとは相成候○牛丸は書もよく、又画を
 よくし、衛生報告ニいつも画をまじへ、且又其母^江送る書状ニはいつも風俗、又は戦闘の
 状を画きて送れるゆへ小官より其画を陛下并東宮殿下の御覧ニ奉供りしことも度々有之候、
 同人平生頗る忠実勤勉故ニ、いつも必要之場所に被需、他人に頭拔せし性行、技能ある故
 也、今回役ニも三度まで繰返し出征を被命、功績著明なりしも、所謂辛苦功業皆一夢、思
 ふて此ニ至れば、当人之心と母堂之情とを推し量、哀悼に不堪候、況や国家大ニ軍備を拡
 張す今日、此有為之士臣を失ふたる小官の心は、他人の推察有よりも尚数倍の悲酸を覚候、
 併し前ニ述ふることく、生前は拝謁天覧に特殊之恩過を拝し、又死後は恩給之賜あり、貴
 官より母^江もよろしく御歴め有之度候也、

十二月四日

於大本营

石黒衛生長官

i 山田は、明治14年(1881)以来陸軍に奉職。日清戦争中は大本营野戦衛生長官部附など、医療方面に勤務し関連書の出版に従事している。同39年(1906)免官。

戸塚軍医部長殿ⁱ

案下

(封筒表書)

仙台市

留守第二師団軍医部

戸塚軍医正殿

小松軍医正殿ⁱⁱ

直披

(封筒裏書)

大本營

石黒軍医総監

(書簡3)

牛丸冬君、六日於台北ⁱⁱⁱ 病死之段、只今石坂軍医部長^{iv} より電信に接し不堪悲歎候、同人は特ニ有為之才能有之者故、抜でて赴任為致候処、今回之訃音、実子を失ふたるよりも悩悼候、同人家族の聞く所ニよれば、老母と妻と有之由^v、家計等如何ノ有様ニ候や、是亦被案候、葬儀事等同僚打寄厚く心配被致候儀候、尚葬式之時ニも祭文等も可遣候へ共、不取敢^(有力) □ ましの事也、

十一月十日

石黒長官

戸塚軍医部長殿 (印)

^(木方)
小村病院長殿^{vi}

5. 謝辞

牛丸和人様には、一族に関する御教示を頂きました。感謝申し上げます。

書簡の解説や人物比定に際し、籠橋俊光（東北大学大学院文学研究科准教授）、中野良（国立公文書館アジア歴史資料センター研究員）、小幡圭祐（日本学術振興会特別研究員）、清水翔太郎（東北大学史料館学術研究員）の各位からご助言を賜りました。厚く御礼申し上げます。

本稿は JSPS 科研費18H03584の助成をうけたものです。

-
- i 日清戦争に際し予備役から招集され留守第二師団に勤務、明治29年（1896）1月に除隊となった戸塚正一（陸軍一等軍医正）か。
 - ii 明治20年代に小松姓の軍医正は複数いるが、現役の軍医であれば小松維直か。
 - iii 他の諸記録や、石黒自身も後に石碑に「遂歿台南」と記すので、この時点での誤伝か。
 - iv 石坂惟寛（1840-1923）。日清戦争に従軍し、1895年（明治28）9月から台湾総督府陸軍軍医部長（～翌年1月）。第6代の陸軍軍医総監。
 - v 牛丸に妻があった点についても、誤伝と思われる（牛丸和人氏のご教示による）。
 - vi 同時期に「小村」姓の病院長は見当たらず。あるいは仙台衛戍病院長だった木村達か。

註

- 1) 明治24年(1891)11月16日付の卒業証書が現存する(牛丸文書I -1-10)。
- 2) 以上は東北大学百年史編集委員会編『東北大学百年史』第5巻(東北大学出版会、2002年) pp.556-557。
なお、おそらく牛丸が在籍したと思われる秋田医学校の概要は、当時の秋田県庁の庶務課が明治22年(1889)に作成した『秋田県略史』巻4(秋田県公文書館所蔵、資料番号930103-12246)に記述があり、それ等を元に秋田県編『秋田県史』第5巻明治編(秋田県、1977年) pp.1131-1135や、秋田市編『秋田市史』第4巻近現代1 通史編(秋田市、2004年) p.214にまとまった記述があるものの、牛丸の在籍記録などは未確認。
- 3) 「…冬さま御儀台湾にてふくまくゑんに御かゝり十一月六日ついに死去なされ」(「原田種恒書簡」明治28年12月6日付、牛丸文書I -6-4)。なお、「征清役病死・戦死者一覧」に「十一月十一日於台南舎營病院病死 台湾総督府二等軍医牛丸冬 同(秋田)市東根小屋町」とあるが(『秋田市史』第11巻近代史料編上、2000年、p.508)、逝去日は誤伝か。
- 4) 冬自身の子孫は存在せず、彼の逝去後に両親(平八・キク)が、平八と先妻の間の娘が成田氏に嫁ぎ生まれた子(兵衛)を養子に迎えた。和人氏は兵衛の孫にあたる。『秋田県史』(1977年)には、牛丸平八が明治6年(1873)に「学区取締」に任ぜられ県下の学制実施に従事したこと(第5巻、p.927)、牛丸兵衛が県下の職工の組織化を図ったこと(第6巻 p.17、pp.27-28)の記述がある。秋田魁新報社編『秋田人名大辞典』(秋田魁新報社、1974年)には牛丸兵衛が立項されている。
- 5) 所蔵史料の目録は <http://www2.archives.tohoku.ac.jp/tuda/tuda-index.html>、展示記録は <http://www2.archives.tohoku.ac.jp/tenji-shinkokai.html> 参照。
- 6) 大本営野戦衛生長官部編、東北大学附属図書館医学分館所蔵。同書については、森富『日清戦争と軍医森鷗外—『明治二十七八年役陣中日誌』を中心として—』(鷗出版、2008年)が詳しい。
- 7) 当時の一等軍医正は中佐に相当。陸軍軍医団編『陸軍衛生制度史』(1913年) p.224-225参照。
- 8) 森林太郎著・木下杢太郎ほか編『鷗外全集』33(岩波書店、1974年) p.13。
- 9) 『鷗外全集』33、p.21。
- 10) 『鷗外全集』33、pp.23-24。
- 11) 『鷗外全集』33、p.35。
- 12) 『鷗外全集』33、p.36。
- 13) 森林太郎著・木下杢太郎ほか編『鷗外全集』35(岩波書店、1975年) p.237。
- 14) 『鷗外全集』35、p.243。
- 15) 末延芳晴『森鷗外と日清・日露戦争』(平凡社、2008年) pp.35-43では、鷗外は戦掌上からも、旅順の惨状を見聞きし、十分知り得たことを指摘する。
- 16) 濁水溪を10月6-7日に渡河(第41-42図)など、牛丸の行軍日程は能久親王麾下の部隊と重なるようである。又吉盛清『台湾支配と日本人』(同時代社、1994年) p.14「北白川宮能久親王御進軍行程一覧図(『台湾総督府内務局』昭和十年より)」参照。
- 17) 『鷗外全集』33、p.112。
- 18) 『鷗外全集』35、p.255。
- 19) 注14末延著書、pp.93-107。
- 20) 当時の大本営の主要構成員は、参謀総長(開戦時は熾仁親王、病没後は彰仁親王)のもと、陸軍参謀次長の川上操六(兼兵站總監、陸軍中將)ほか陸軍参謀等、海軍軍令部長の樺山資紀(海軍中將)ほか海軍参謀等、加えて各機関から管理部長(村田淳少佐)、運輸通信長官(寺内正毅少將)、野戦高等郵便部長(湯川書記官)、野戦監督長官(野田豁通)、そして野戦衛生長官(石黒軍医總監)であった。広島県編『明治二十七八年戦役広島大本営誌』(広島県、1934年) pp.28-30参照。
- 21) 石黒の自伝として『懐旧九十年』(大空社、1994年など)があるが、牛丸関係記事は見つからなかった。
- 22) 秋田藩主佐竹氏居城跡に作られた公園。明治2年(1869)の版籍奉還により陸軍省の所管。同23年の佐竹

氏へ払下げに伴い、本丸・二の丸を秋田市が借受け市民に開放。その後、同29年県に移管、昭和28年（1953）再び秋田市に移管（秋田市公園課の御教示による）。

- 23) 東北大学史料館が所蔵する「記念碑関係資料」（牛丸 I -1-8）には、石碑（銘板は縦約124cm、横約86cm）の設計図下書や、制作に関わった若狭東吉の請取状などが含まれるが、設立の詳細は不明。碑額「陸軍軍医牛丸君碑」（大山巖書、下写真）は縦約32cm、横64cm 弱。



- 24) 一～三等軍医は尉官相当官であり、三等軍医は少尉、二等軍医は中尉に相当する。注7 参照。
- 25) 遠藤永吉・岡崎茂三郎著『日清戦争始末』（江湖堂、1895年）pp.373-375に詳しい。
- 26) 封筒の表面に二銭切手貼付、茶スタンプ2「武蔵／東京飯田町」以下および「陸前／仙台」以下あり。裏面に朱角印「緘」上下二箇所あり。
- 27) 封筒の表面二銭切手貼付、茶スタンプ「武蔵」以下および「陸前／仙台」以下、および朱スタンプ「臨」あり。裏面に朱橢円印「石黒」上下二箇所あり。
- 28) 宮内庁編『明治天皇紀』第八（吉川弘文館、1973年）p.857によると、7月8日条には「午後二時四十分大本営会議に臨御、四時四十五分入御あられる」とあり、牛丸の謁見の実否は確定できない。その典拠である『侍従日録』（宮内公文書館所蔵）同日条も、「二時四十分ヨリ四時四十五分迄御会議出御被為在候」という記述にとどまる。